



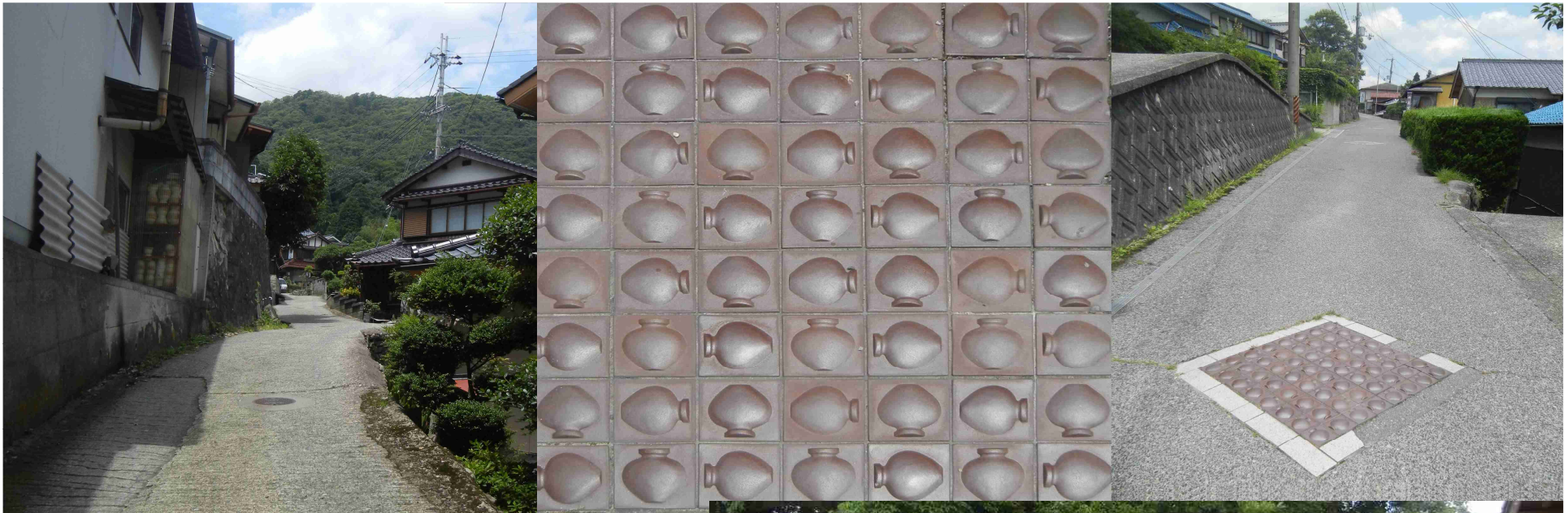
丹波焼の郷 篠山市 今田町立杭 Walk 2012.7.10.

山野草愛好家では有名な「伝市窯」を訪ねる

丹波焼の郷「立杭」 山野草愛好家では有名な「伝市窯」 2012.7.10.
植木鉢を専門にする丹波焼窯元と教えてもらって、朝顔鉢を求めて 訪ねました



丹波焼の里 立杭 (篠山市今田町)
窯元マップ



伝市窯 朝顔鉢



山野草用伝市鉢(写真より)



立杭 やきもの通り 稲荷明神前にある「伝市窯」
2012.7.10.



陶の郷から眺めた窯元が並ぶ立杭の町並 2012.7.10.



やきもの通りから眺める陶の郷



立杭の街を南北に通り返ける県道292

丹波焼の郷 立杭



篠山

丹波焼の郷 立杭

丹波焼の郷

立杭

舞鶴若狭道

大川瀬ダム



Image © 2012 DigitalGlobe
 Image © 2012 GeoEye
 © 2012 Cnes/Spot Image





今 山間の街道筋では 合歓の花が満開 箕谷/淡河線で 2012.7.10.







丹波焼の郷「立杭」に入ると 緑の田園の向こうに左;陶芸博物館 右:陶の郷の建物が見える



陶の郷から立杭の町並み 登り窯が幾つも見える 2012.7.10.



やきもの通りに沿って 丹波焼の窯元が幾つも並ぶ立杭の町並み



やきもの通りに沿って 丹波焼の窯元が幾つも並ぶ立杭の町並み





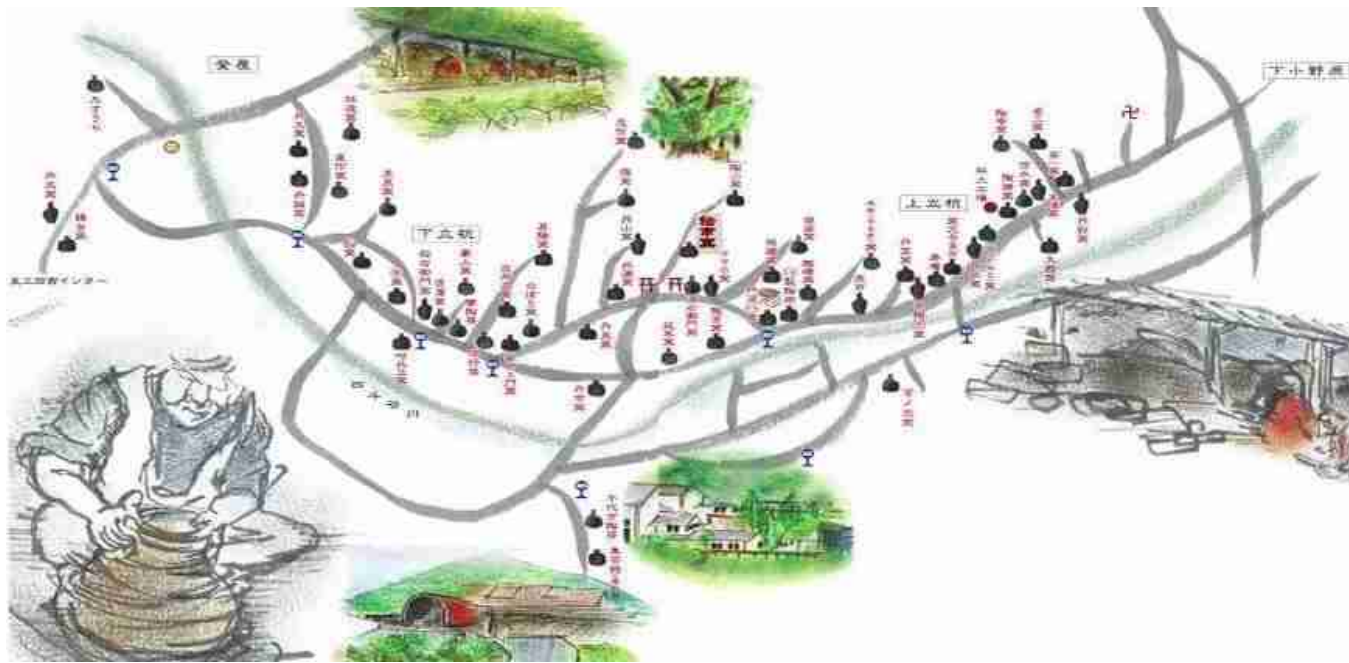
陶の郷に車を置いて 伝市窯もある やきもの通りへ 2012.7.10.

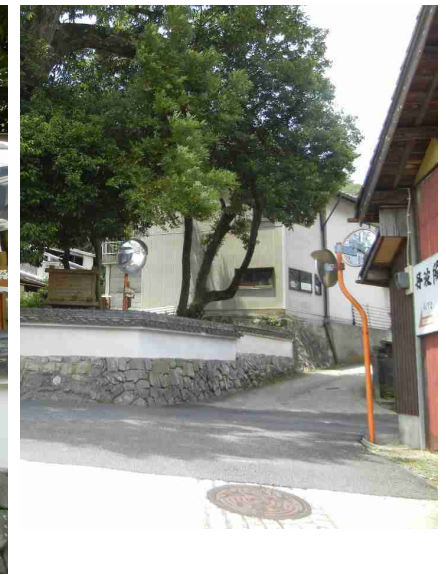
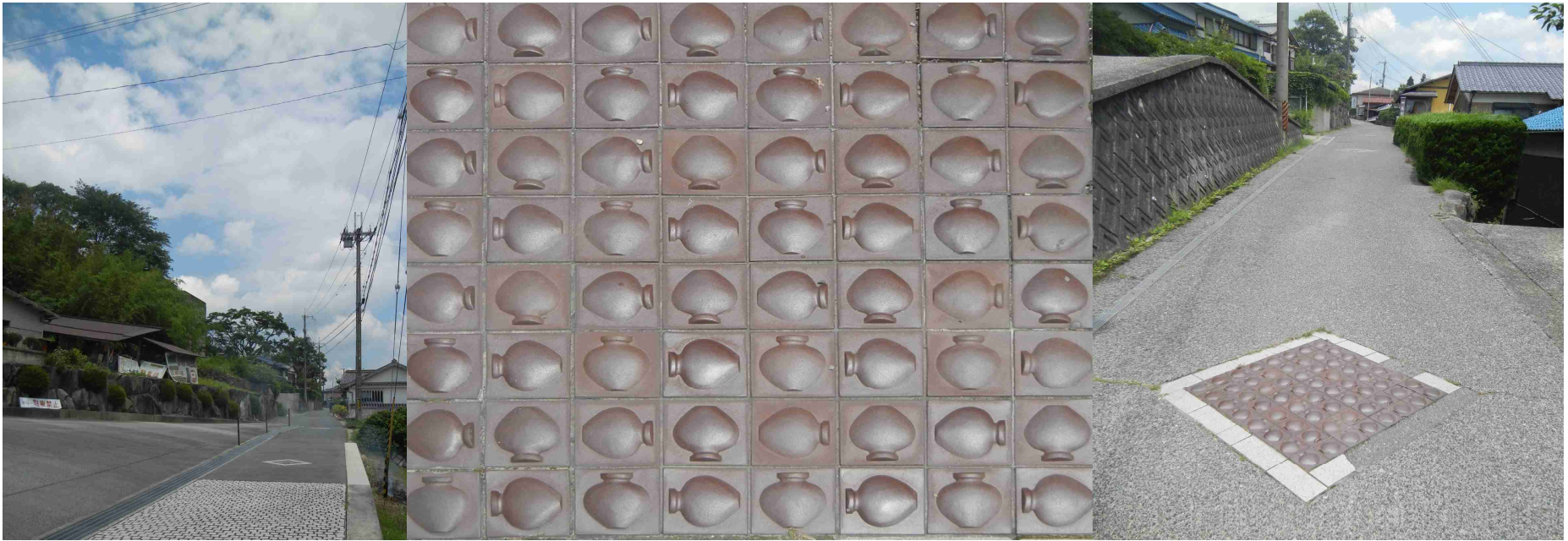


陶の郷の下から 北側にある陶芸博物館の方を眺める 2012.7.10.



陶の郷から 正面 伝市窯もある やきもの通りへ 2012.7.10.





正面の森 大アベマキの巨樹がある 大稻荷大明神周辺 すぐ奥が伝市窯 2012.7.10.



県指定文化財 **丹波立杭登窯** 

指定年月日 昭和48年3月9日

所有者・管理者

市野正雄、市野晃司、大上 亨、清水郁夫、田中義治、上立杭区

本窯は現在使用中の共同窯である。山の勾配を利用して東西47メートルにわたって長く築かれ、9袋をもつ登窯である。記録によれば、明治28年の構築で、立杭において現存する最も古いもののひとつである。工芸品、雑器を主として焼成している。

現在ではヒドコロをバーナーに、ヒサキ(俗にハチノスという)を煙突にした立杭窯が多い中であって、本窯はよく古様を保っている典型的な登窯である。

なお、丹波立杭窯の製作技術は昭和32年に国の記録作成等の措置を講ずべきものとして選択されている。

平成4年11月

兵庫県教育委員会



丹波立杭登窯 萩焼の登り窯(連房式の登り窯)などと違う独特の形に 構造が気になっていましたが、今回内部構造を理解しました

丹波焼 丹波立杭陶磁器共同組合 tanbayaki.com

丹波焼 登り窯の構造より

<http://www.tanbayaki.com/2012/top7history18.shtml> より

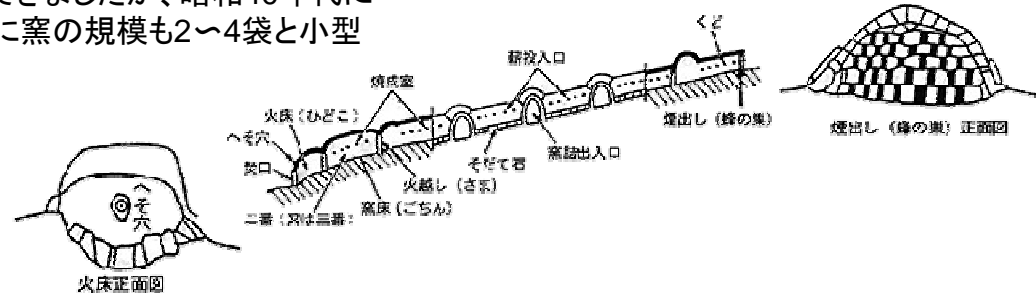
・登り窯の構造

登り窯の築造は、山麓の傾斜地に「そだて石」とよぶ石を並べて基礎とし、割り竹を縄で編んだものを支えとして、両側から「まくら」を半円形に積み上げます。このまくらは、山土を型に入れてこしらえた立方体の日干し煉瓦(れんが)で、現在では鉄板を支えとして積まれることが多いようです。このとき出入り口や燃料の投入口も設けられ、最後に「ごちん」とよぶ窯内部の床を厚く塗り固めて完成します。

窯は、焚き口のある「火床」に続いて焼成室が連なっていますが、火床に続く第一焼成室と「くど」とよぶ最先端の焼成室を除く、中間の焼成室の長さはほぼ均等です。この焼成室は「袋」とよばれ、それぞれ下端に出入り口が設けられています。焼成室である袋と袋の境界には2〜4本の柱が設けられ、天井を支える役目をしています。これを「火がき」「火越し」あるいは「さま」とよびます。

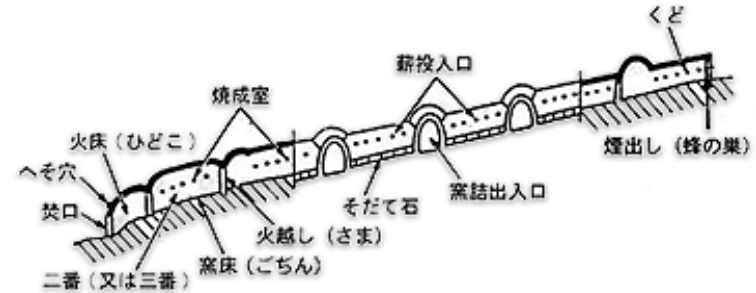
窯の先端部のくどには煙出しが設けられ、これは「くど先」「火さき」あるいはその形から「蜂の巣」とよばれています。しかし、最近ではこの火さきに煙突を取り付けたものがほとんどとなり、蜂の巣から吹き出される真っ赤な炎の美しさが見られなくなりました。

窯の長さは焼成室(袋)の数によりますが、現存する最古の窯として兵庫県の重要民俗資料に指定されている上立杭の登り窯は、明治28年に築造された長さ47メートル、袋数9の窯で、よく古様を保って使用されている代表的な登り窯といえます。かつて多数の袋をもつ登り窯は、いずれも共同窯として使用されてきましたが、昭和40年代に入るところから個人窯が普及し始め、製品の小物化とともに窯の規模も2〜4袋と小型化しました。



登り窯による焼成

<http://www.tanbayaki.com/2012/top7history19.shtml> より



・窯入れ

成形・釉(くすり)掛け及び乾燥が終わると、製品は窯場に運ばれて焼成室に入られます。共同窯時代には「かまやかご」とよぶ竹かごに入れて窯場まで運びました。焼成室に入れる「窯入れ」は、製品を輪台の上に置いて窯床(ごちん)に並べます。小物は、大きなものの中に入れて、また、サヤ(ゴウともいう)とよぶ器に入れて、製品を重ねて置く場合は、接続部分にモミ灰をつけたり、土を小さく丸めてモミ灰をまぶした「ハマ」とよぶ玉を間にはさみます。この窯入れが終わると、入り口は「まくら」でふさがれ、粘土で密閉されます。



・窯焼き(窯焚(た)き)

焼成である「窯焼き」は、まず「ぬくめ(あぶり)」から始まります。このぬくめは、温度を徐々に上げていく窯焼きの最初の段階です。昭和30年ごろから、ぬくめの燃料に重油が用いられることが多くなりました。窯の規模によって一定しませんが、ぬくめの作業が30～40時間経過すると、袋の中の炎は上方へ上がり、各袋に設けられている両側のアナから、燃料の松割り木を次々と投入する本焼きに入ります。こうして室内の温度は約1,300度に達します。

この焼成に要する時間は約60時間で、昼夜兼行で作業が行われます。

登り窯の数倍を要した穴窯による長時間の焼成は、緑色または鳶(とび)色を帯びた自然釉の美を生み出しましたが、登り窯における焼成は、燃料である松の灰と人口釉との融合によって、鮮やかな窯変美を生み出すのです。



・窯出し

窯焼きが終わると、焚き口や燃料の投入口であるアナは粘土で密閉され、約一昼夜の冷却時間を置いて「窯出し」すなわち焼成品の取り出し作業を行います。

窯入れからこの窯出しまではほぼ一週を要しますが、現在ほとんど全面化した個人窯の場合の所要時間は若干短くなっています。





共同の登窯を反対側から眺める 2012.7.10.

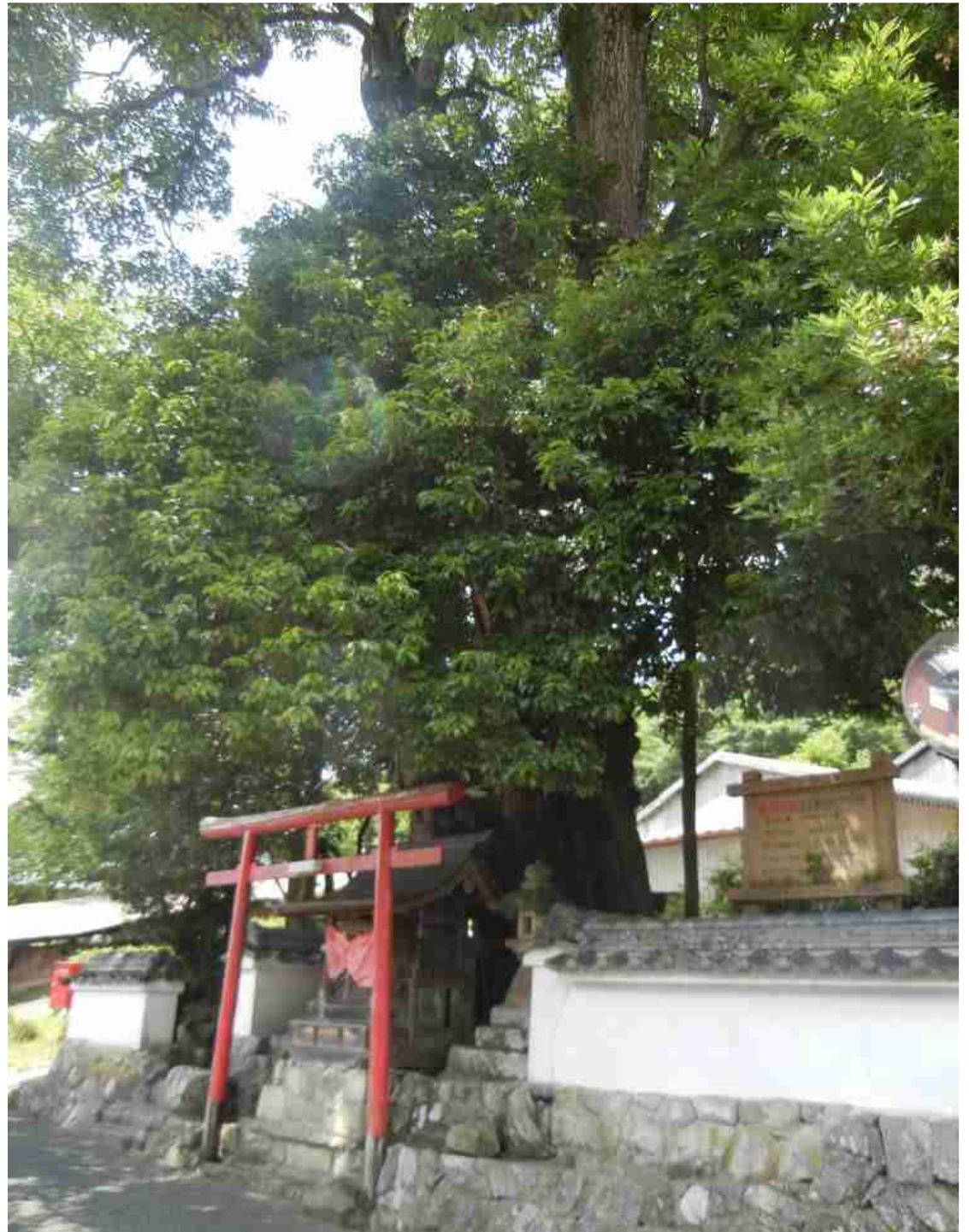


すぐ隣にも 大きな登り窯が見える 2012.7.10.



大アベマキがある稲荷大明神前

やきもの通り 2012.7.10.





やきもの通りから 東側の丘にある陶芸博物館・陶の郷を眺める 2012.7.10.



やきもの通りから 東側の丘にある陶の郷を眺める すぐ横に窯元案内標識 2012.7.10.





「伝市窯」へ入る小道

入ってすぐ右側

2012.7.10.





丹波 立杭「伝市窯」 窯元とご一緒に 2012. 7. 10.



「伝市窯」で 窯元 市野伝市さんと 2012.7.10. ほんに 気さくな 根っからの陶芸家さんでした

「植物にやさしい鉢」それが「伝市鉢」 山野草愛好家から絶賛の人気を呼ぶ

植木鉢なんて…とっていましたが、 植物を育てる鉢としてのこだわりが 「伝市鉢」の真骨頂
土・配合・形 そして 焼成 それらすべてに 伝市鉢の創意工夫が注ぎ込まれている

ちなみに多用途の焼き物の流用や土や形の流用では 植物は腐ったり・枯れたり すくすくとは育たないと……

揺ぎ無い工夫と自信が「植物にやさしい鉢」を生み、 それが山野草愛好家から絶賛の人気を呼ぶ

80を超えたお歳とは 思えぬ 焼き物への情熱とあくなき挑戦 びっくりの陶芸家さんでした





インターネットで見つけた伝市窯の登り窯





県道292を北へ立杭を走り抜ける 2012.7.10.



やきもの通りに沿って 丹波焼の窯元が幾つも並ぶ立杭の町並み





丹波焼の郷 篠山市 今田町立杭 Walk
2012.7.10.

【おわり】

By Mutsu Nakanishi



丹波焼の里 立杭 (篠山市今田町)
窯元マップ



今 山間の街道筋では 合歓の花が満開 箕谷/淡河線で 2012.7.10.